

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1361

人間における「わがもの」という観念をすてて心を統一し、あわれみ（同情）に専念する。

（釈迦）

△解説▽わがもの、自我という壁をつくらず、他の人々の自己をしいに自分の自己として取り入れていく。境界をひろげていく。そうなる、自分を傷つけたくないのと同様に他の人をも傷つけたくない。なぜならば、あわれみ（同情）の気持ちをもてるようになるから。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.2 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1360

道の人よ、道を学ぶ者が実践してはならない二つの極端がある。

（釈迦）

△解説▽たとえば、欲望のままに欲楽にふける、また、厳しさが目的になるような身をさいなむ実践。これらはためにならない。両極端に近づかず中道を進むべき。しかし、「中道」とらわれると同様に極端になつてしまう。漢訳では「至要之道」とする。つまり、バランスのとれた正しい肝心かなめの道である。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.1 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1363

沈黙している者も非難され、多く語る者も非難され、すこしく語る者も非難される。世に非難されない者はいない。

（釈迦）

△解説▽それぞれがエゴをもって生活する娑婆世界である。他の人からの批判を受けることはだれでもが経験する。当然である。全員がさつていて世界ではないのだから。他人のエゴと自分のエゴがぶつかるからこそ、そこに正しい対応の仕方が求められる。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.4 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1362

遠くたどつてみると自分の背後には無数の因縁があり、多くの条件・恵みが働いて、ここに一人一人が個人として現れ出ているのです。

（中村元）

△解説▽落ち着いてこうした観察を進めていくと、自我という壁は本来的にあるものではないと気づく。この文章に続いて、「そういうことを思うと、一人一人の個人が、偉大な宇宙を含んでいるのです」とも語られている。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.3 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1365

善は為し難い。何人でも善を
為し始める者は、為し難いこと
を為すのである。

（アシヨーカ王）

△解説▽わたしたちは、まず、善
と悪の区別を知らなくてはならな
い。そして自己を制御し、心を善へ
と向かわせるのである。しかし、簡
単ではない。邪魔をする煩惱が生じ
るから。それを見極めて、適正に対
処しながら、慈しみの心を育てて、
進んでいきたいものである。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.6 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1364

自らの宗教のみを賞揚し、あ
るいは他の宗教を非難する者
は、こつするため、却って一層
強く自らの宗教を害うのであ
る。

（アシヨーカ王）

△解説▽アシヨーカ王は、いろい
ろな宗教・宗派が共同して、法の精
神を実現することを望んだ。だから
互いに法を聞き合って、自分と異な
るところをも尊重し、和合すること
が善と考えていた。自分だけが正し
いとして他を非難することを戒めて
いる。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.5 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1367

たとえば「貪り」などという
煩惱がありますが、それが実在
するものであったなら、いつま
で経ってもなくなることはない
わけです。

（中村元）

△解説▽煩惱と聞くと、何か固定
的で特別なものがあると思っていま
すが、それは苦しみを生み出す心
はたらきである。固定的に実在しな
いからこそ、つまり空であるから、
修養によって煩惱をなくしていくこ
ともできるはずだ。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.8 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1366

夫れ事は独り断べからず。必
ず衆とともに宜しく論ずべし。

（聖徳太子）

△解説▽重大なことから決定す
るときは一人ではならない。か
ならず多くの人々と議論すべきだ。
小さな事柄ならその必要もないが、
重大なことになると、お互い凡夫で
あるのだから、過ちがあるかもしれ
ない。論じて正しい方向を考えてい
けば、道に外れることなく、道理に
かなうだろう。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.7 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1369

好んで其の悪を知り、悪んで其の美を知る者は、天下に鮮し。
（『礼記』）

△解説▽好きな人の短所がわかり、嫌いな人の長所がわかる人は、この世にはめったにいない。どうしても、好き嫌いという自分の感情を通して見てしまいが、それは正しい見方ではない。勝れたこと、欠点はあるのままだと見て、適切に対応すること、自他ともにためになる人間関係が生まれる。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.11 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1368

三種の苦に打ちひしがれているが故に、その苦を除く手段に關して研究がなされる。
（『サーンキヤ頌』）

△解説▽ここでいう三種とは、1、生きていくこと自身に由来する肉体的・身体的苦しみ（病氣や愛する人との別離など）。2、外から向かってくる苦しみ（敵対する人や動物など）。3、天候や自然環境に基づく苦しみ（寒さや暑さ、風や雨など）であるという。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.10 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1371

人を知る者は智なり、自ら知る者は明なり。人に勝つ者は力有り、自ら勝つ者は強し。
（『老子』）

△解説▽他の人を見抜く者は知恵がある人といえる。しかし、自分をよく知る人は、聡明で物事の道理に明るい人であり、智者よりも勝れている。他の人に勝つ者は力がある人であるが、自分の「欲望の力に」勝つ者は、力を備えた人よりも勝れた強者であるという。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.13 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1370

君子は和して同せず、小人は同じて和せず。
（『論語』）

△解説▽ここで「和して」は、心からうちとけて同調すること。「同じて」は、自分で考えることなく、へつらつたりして相手の言動にすぐ同調すること。立派な人格者（君子）は人とよく調和するが、むやみやたらと同調しない。一方、人徳のない小人物はやみくもに同調するが、心からうちとけて調和しない。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.12 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1373

志こころの立たざれば、終日読書に
従事まことするとも、亦また唯ただだ是れ閑事
のみ。故に学を為なすは志を立つ
るより尚なほなるは莫なし。（『言志録』）

△解説▽志が立っていないければ、
一日中本を読んでいたとしても、そ
れはただむだ事にすぎない。学問を
する場合は志を立てるより大切なこ
とはない。薪を運んだり水を運んだ
りしてもそこに学問の道はある。ま
して志ある読書で達せないものはな
いという。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.15 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1372

学は立志より要なるは莫なし。
而して立志も亦また之れを強たづるに
非あらず。只だ本心の好む所に従
うのみ。（『言志録』）

△解説▽学ぶときには、目的を定
めてなし遂げようとするより肝
要なことではない。しかし、心をふる
い立たせるのも、外から無理に強制
するのではなく、ただ、本心の好み
にしたがって自らおこなうのがよ
い。目標を立て、実践し、継続した
努力が大事。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.14 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1375

心が沈んでしまつてはいけな
い。またやたらに多くのことを
考へてはいけない。腥なまぐさい臭気な
く、こだわることなく、清らかな
な行いを究極の理想とせよ。（釈迦）

△解説▽心が沈んでしまつることな
く、また、多くのことに心をさまよ
わせないようにし、なまぐさな行い
をせず（つまり、煩惱を生じさせな
いようにして）、なにもにも執着
することがない清らかな実践を目指
すべきである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.17 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1374

城門の外に立つ柱が地の中に
打ち込まれていると、四方から
の風にも揺るがないように、
諸々の聖なる真理を觀察して見
る立派な人は、これに譬たとえられ
るべきである、とわれは言つ。（釈迦）

△解説▽ここで立派な人々とは、
ブツタの教えにもとづいて真理をは
つきりと知る人たちの集まりであ
る。同じ目的を持った人たちの集ま
りをサンガ（僧伽）といい、勝れた
宝はその中にあるという。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.16 中村元記念館協力